

「とうがく競技祭 2015」実践報告

ーパラリンピック種目を導入した取り組みー

木村華織*・黒須雅弘*

1. はじめに

本稿は、東海学園大学スポーツ健康科学部が2015年11月12日に実施した「とうがく競技祭 2015」について報告するものである。東海学園大学（以下、本学とする）では、2014年6月に締結した2020年オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会との大学連携協定（以下、大学連携とする）をきっかけに、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントの普及を目的とした事業に取り組んでいる。本稿で取り上げる「とうがく競技祭」もそのひとつであり、2014年からスポーツ健康科学部が実施しているイベント型のオリンピック・パラリンピック教育（以下、オリパラ教育とする）である。

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京大会とする）の開催決定以降、全国的なオリパラ教育の促進が求められており、大会組織委員会やスポーツ庁をはじめ、自治体や民間機関等が様々な取り組みを始めている。大会組織委員会は大学連携協定を結ぶことにより、全国各地の大学・短期大学を拠点としたオリパラ教育の推進やグローバル人材の育成、大学の特色を生かした取り組みを求めている。大学連携の締結から2年余りが経ち、工夫に富んだ大学独自の取り組みも多数報告されている¹⁾。

また、スポーツ庁は2016年7月に提出された「オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議の最終報告」²⁾において、「各機関におけるオリンピック・パラリンピック教育の推進のための方策」を示している。高等教育機関における大学生への教育については、「各大学の状況や学問分野の特性等も踏まえながら、オリンピック・パラリンピックに関する教育が幅広く行われることが期待される。特に、体育教員をはじめとする教員養成に関わる学部や課程等においては、オリンピック・パラリンピックへの理解のみならず児童生徒への指導方法等も含めた教育の充実を図ることが求められる」と記されている。この指針にもとづけば、保健体育科教員養成課程を有するスポーツ健康科学部には、学校現場で実践することができる専門性を生かしたオリパラ教育の教材づくりや運営方法などの経験を積ませる教育活動が求められているといえる。

オリンピックに関する学習については現行の学習指導要領にも示されており、中学校・高等学校においては、保健体育「体育理論」に盛り込まれている³⁾。現行学習指導要領への改訂後には2020年東京大会の開催が決定し、学校現場におけるオリンピック教育実施の要請は強まるばかりである。しかし、膨大な日常業務に追われる現場教員において、オリパラ教育の教材を新たに創造することは現実的に難しい。そこでスポーツ健康科学部では、在学生へのオリピック・パラリンピックへの理解促進に加え、体育大会や運動会というスポーツイベントを活用して行うオリパラ教育の実践事例を提案したいと考えた。こうした構想から生まれたのが「とうがく競技祭」⁴⁾である。とはいえ、2015年に2回目を開催したばかりの本イベントは未だ模索状態にある。

本稿では、競技祭 2015 で新たなプログラムとして導入した「パラリンピック種目の体験」の内容とその教育効果について報告する。以降では、イベント全体をさす場合には「とうがく競技祭」とし、2014年に実施したものは「競技祭 2014」、2015年に実施したものは「競技祭 2015」と表記する。

* 東海学園大学スポーツ健康科学部講師

2. 「とうがく競技祭」の目的

「とうがく競技祭」の目的は、1) 在学生に対するオリンピック・パラリンピックに関する理解の促進、2) 保健体育科教員養成課程校として、学校現場で実践可能なオリパラ教育の事例を学生たちに提示することである。このオリパラ教育の対象は、スポーツ健康科学部の2年生と1年生である。2年生は企画運営者として、1年生は当日の参加者として本イベントを経験する。1年生では参加、2年生では企画運営というプロセスを踏む理由は、1年生で体験した学生が上級生になって企画運営を行う（「体験」から「実践」へと繋げる）体系的なオリパラ教育を目指しているからである。このために、1年生には競技祭前に90分間の知識学習を実施し、2年生はそのほとんどが春学期に開講されている体育史を受講することで、オリンピックに関する基礎的な知識を得るプロセスを踏むようにしている。

また、「とうがく競技祭」は、1年生を対象とした学部行事も兼ねていることから、1年生は学年全員（2015年度は289名）が参加することを義務付けている。その他にも、1年生同士のチームワーク醸成という目的も含まれることから、現在のところ17つのゼミを4団（赤・青・黄・緑）に分けた団別対抗戦形式で行っている。

3. プログラムおよび運営上の変更点

表1は、競技祭2014と2015のプログラムである。変更点は太字にして示した。競技祭2014からの変更点は、実施プログラムに関するものが2点と運営上のものが1点であった。

表1. 「とうがく競技祭」のプログラム

時間	「競技祭2014」	時間	「競技祭2015」
9:00	学生集合・出欠確認・ キトンの配布	9:00	学生集合・出欠確認・ Tシャツの配布
9:30	開会式	9:15	開会式
10:00	古代スタディオン走（全員参加）	9:45	古代スタディオン走（全員参加）
10:30			
11:00	綱引き（ 登録選手・男女別 ）	10:30	綱引き（ 登録選手・男女混合 ）
11:30			
11:30	昼食	11:00	パラリンピック種目体験
12:00		11:30	（全員参加、3種目のうち1種目）
12:30	芸術競技・ダンス（全員参加）	12:00	昼食
13:00			
13:30	団別リレー（登録選手・男女混合）	13:15	芸術競技・ダンス（全員参加）
14:00	閉会式	14:00	団別リレー（登録選手・男女混合）
14:30	解散	14:30	閉会式
		15:00	解散

（1）プログラム上の変更点

実施プログラムに関する競技祭2014からの変更点は、1)男女別で実施していた綱引きを男女混合にしたこと、2)パラリンピック種目の体験を設けたことである。1)については男子学生の出場機会の担保（男子学生が1学年の7割を占めるため）のため男女別に実施したが、競技祭2015ではパラリンピック種目の導入もあり、十分な出場機会を確保できたため男女合同での実施に変更した。2)については、多様な身体観を経験することとパラリンピックへの興味関心を高めるという観点から導入を試みた。これについては別項にて詳述する。

(2) 運営上の変更点

今回から「キトン」の着用が古代スタディオン走の時のみに限定されたことである。キトンは古代ギリシャ人の生活着であり、競技祭 2014 では 1 日を通してこれを着用することを試みた。しかしながら、競技中にキトンが破れ事故やケガに繋がる可能性があることから、キトンの着用は古代スタディオン走の時のみに変更した。その代わりに五輪色の T シャツを作成し、イベント中はそれを着用するようにした。五輪色の T シャツの着用は、各団を見分けやすくするという実務的なことだけでなく、各団のチームワーク向上、五輪（形・色）に関する教育、全員参加のダンスプログラムへの活用を意図したものであった。

タイムスケジュールについては、スタートの時間を繰り上げることでパラリンピック種目の追加分を補うことができた。パラリンピック種目が延長する可能性も考慮し、昼食時間を 15 分ほど長く確保したが、時間内に十分に終えることができた。

4. パラリンピック種目の体験

競技祭 2015 では、従来の「古代スタディオン走」「綱引き」「ダンス」「リレー」に加え、パラリンピックに関連する種目の体験（以下、パラ体験とする）を取り入れた。実施した競技種目は「ブラインド走りレー」「ホイールチェアリレー」「シッティングバレー」の 3 種目である。前回の競技祭 2014 では、古代オリンピックと近代オリンピックの要素を取り入れた競技種目でプログラムを構成したが、今回は、パラリンピックへの興味関心を促すこと、さらにはパラリンピック種目の体験を通して学生たちにどのような教育効果をもたらすことができるのかを問うことを目的に、上記 3 種目を体験種目としてプログラムに取り入れた。本イベント終了後には、参加者にアンケート調査を実施し、パラリンピック種目導入の教育効果を検証した。

体験種目として取り入れた 3 種目のうち、「ブラインド走りレー」と「ホイールチェアリレー」はパラリンピック競技大会の正式種目ではないが、特性の異なる 3 つの競技を本イベントで実施可能なかたちに変更して行った。時間の関係上、パラ体験は 3 種目同時進行で展開され、今回は 1 人 1 種目のみの体験とした。体験する種目は実行委員によって事前にゼミごとに振り分けられ、対抗戦としての得点化も行わなかった。以降では、それぞれの種目の実施方法・ルールについて説明する。

(1) ブラインド走りレー

ブラインド走りレーでは、第一に視覚情報がない状況そのものを体感すること、そうした中で走行すること、さらにガイドとともに協力しながら 100 m という距離を完走することにより、視覚情報のない中での走行感覚、不安感、距離感を肌で感じることをねらいとした。リレー形式を採用した理由は、リレー形式にすることによってガイドランナーとタイミングを合わせ、声を掛け合って走るという場面を作りたかったからである。

[競技方法およびルール]

- ①各ゼミナール内で 2 人組のペアをつくり、1 名がガイド、1 名がランナーとなる。
- ②各ペア、1 回の走行距離は 100 m とする。
- ③ガイドとランナーは、50cm のガイドロープの両端を持って走行する。
- ④ガイドは奇数レーン（1・3・5・7）、ランナーは偶数レーン（2・4・6・8）を走行する。
- ⑤チームは、同じ団の 2 つのゼミナールが合同で 1 チームを編成する。
- ⑥レースは全 2 レース実施し、団別対抗で行う。
- ⑦ 2 レース目は、各ペアのガイド役とランナー役を交代して実施する。
- ⑧ランナーはアイマスクを着用して走行する。

- ⑨ガイドは、ランナーを先行して伴走することはできない。
- ⑩次走者への中継はガイドロープをバトンとし、中継エリア（5 m）内で中継する。
- ⑪次走者への中継後は、その場で待機する。

[招集方法]

- ①出場者は招集場所に集まり、実行委員より競技方法やルールの説明を受ける。
- ②説明後、各ペア 1 回ずつの試走を行う。
- ③試走後、各団・走順別に各走順のスタート地点へ移動する。

[必要用器具]

ガイドロープ× 4 本

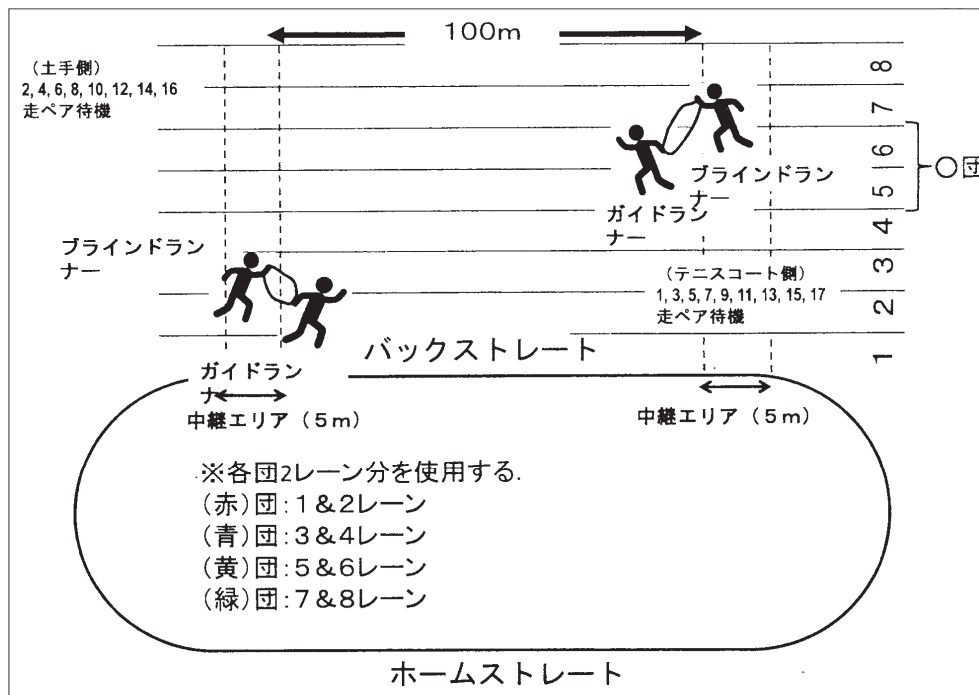


図 1. ブラインド走りレーのイメージ図

(2) ホイールチェアリレー

ホイールチェアリレーでは、第一に車イスそれ自体に乗るという体験をすること、そして車イスを使って走行すること、さらにリレー形式にすることでできる限り速く走行するよう場面設定をした。この試みでは、車イスの操作体験とともに、下肢障がいの有無に関わらず、車イスに乗るという条件を参加者全員が同じにすることで、スポーツやレクリエーション活動がともに楽しめるということへの気づきをねらいとしていた。

[競技方法およびルール]

- ① 1 回の走行は 1 人 50 m とする。
- ② チームは、各団 1 つのゼミナールで 1 つのチームを編成する。
- ③ 1 名ずつホイールチェアに乗り直線 50 m を走行する。
- ④ 陸上競技のトラック 2 レーン分をホイールチェアリレーの 1 レーン分とする。
- ⑤ 50m 地点 (中継地点) で次走者とホイールチェアを乗り換える。
- ⑥ レースは 1 レースのみとする。団別対抗で行い、1 人 2 回走行する (1 巡目が終了したら 2 巡目に入る)。
- ⑦ 次走者がホイールチェアに乗り換えるのは、中継エリア (5 m) 内とする。

⑧走者は中継後、その場で待機する。

[招集方法]

①出場者は招集場所に集まり、実行委員より競技方法やルールの説明を受ける。

②説明後、各ペア 1 回ずつの試走を行う。

③試走後、各団・走順別に各走順のスタート地点へ移動する。

[必要用器具]

ホイールチェア× 4 台 (車イスバスケット用を使用)

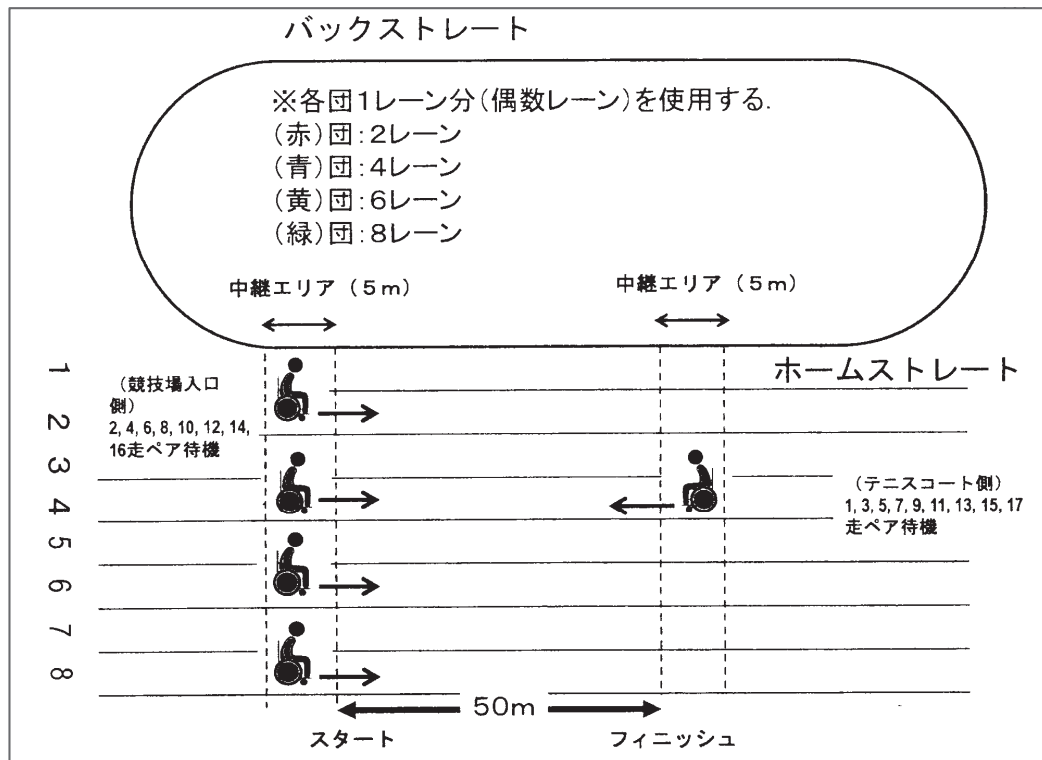


図 2. ホイールチェアリレーのイメージ図

(3) シットイングバレー

シットイングバレーは、今回設定したパラ種目体験の中で唯一のチーム競技である。座位の状態では体を動かさず体験をすること、またその中でボールを操ったり追いかけたりする難しさを体感すること、そして思うように行かない状況をチームで協力しながら進めることをねらいとした。

[競技方法およびルール]

①コートは、サイドライン 5 m、エンドライン 6 mとし、ネットの高さは約 1 mとする。(人工芝で行ったためコートはロープで張り、ネットはバドミントンのネットを使用し、両サイドをハードルに [男子一般の高さ 106.7cm] に取り付けた。)

② 1 チーム 6 人、ゼミナール別の対抗戦形式で行う。

③セットごとにメンバーを入れ替え、全員が体験するようにする。

④得点は 1 セット 10 点マッチで 3 セット行う。

⑤競技者の位置は、お尻の位置によって決定されるため手足はコート外にあっても良い。

⑥サーブは、サービスゾーンから行い相手のコート内へボールを打ち込む。

⑦レシーブの時は、短時間であればお尻を浮かすことが許される (立ち上がりや歩くことは禁止)。

- ⑧スパイクをする場合は、お尻をコートから浮かしてはならない。
- ⑨前衛は、相手のチームのサーブをブロックすることが許される。ブロックを行うとき競技者はお尻を浮かすことはできない。

[招集方法]

- ①ゼミナールごと指定されたコートに集合する。
- ②各コートで実行委員より競技方法およびルールの説明を受ける。
- ③説明後、各ゼミナール数分間の練習を行う。

[必要用器具]

得点板× 2 個、バレーボール× 2 個、ネット× 2 張、ハードル 8 個、ホイッスル× 2 個、おもり× 8 個、コート用のロープ× 2 面分、又釘× 25 本、補助ロープ× 4 本

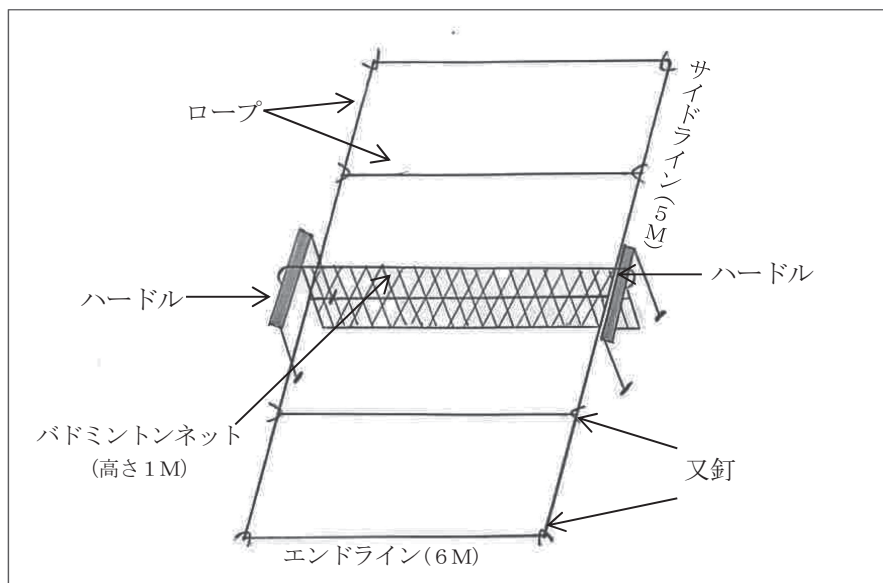


図 3. シッティングバレーのコート設営

5. パラリンピック種目の体験がもたらす教育効果

イベント後に行ったアンケート結果を参考に、パラリンピック体験の教育効果についてみていくことにする。1年生を対象に行ったアンケート調査は、イベントそれ自体の評価を問う 8 項目とオリンピック・パラリンピックへの興味関心を問う 7 項目の計 15 項目で構成されており、7 段階のリッカート型尺度を用いて回答を得た。本報告では、このうち、オリンピック・パラリンピックへの興味関心を問う 7 項目に着目する。

回収できたアンケート用紙は 262 名分、このうち欠損値を除く 258 名分を分析対象とした。表 1 の平均値をもとに「障がい者スポーツへの関心が高まった」という項目の回答結果を平均値より高得点群と低得点群に分け、2 群間における回答の比較を行うために、対応のない t 検定を行った。

表 2. 単純集計結果

質問項目	平均値	標準偏差
オリンピックに関心が持てた	5.14	1.3
オリンピックに関する理解が進んだ	4.79	1.3
オリンピック教育に関心が持てた	4.93	1.3
チームワークの大切さを学んだ	5.73	1.2
ベストを尽くすことの大切さを学んだ	5.60	1.2
フェアプレイの大切さを学んだ	5.55	1.3
障がい者スポーツへの関心が高まった	5.65	1.2

(1) 単純集計

オリンピック・パラリンピックに関する設問のうち、平均値が5.0を上回ったのは「チームワークの大切さを学んだ(5.73)」、「パラ種目への参加体験を通して障がい者スポーツへの関心が高まった(5.65)」、「ベストを尽くすことの大切さを学んだ(5.60)」、「フェアプレイの大切さを学んだ(5.55)」、「オリンピックに関心を持てた(5.14)」であった。いずれの項目も高い平均値を示しているもののオリビズムの理解やオリンピック教育への関心については、その他の項目に比べ、低い値を示した。

(2) 高得点群と低得点群による比較

ここでは、パラリンピック種目の体験がもたらす教育効果についてt検定の結果をもとにみていくことにする。「障がい者スポーツへの関心が高まった」の回答を平均値の高得点群と低得点群に分けて、対応のないt検定を行ったところ、図1のような結果となった。

「オリンピックに関心を持てた($t=10.54, p<.01$)」、「オリビズムに関する理解が進んだ($t=10.14, p<.01$)」、「オリンピック教育に関心を持てた($t=10.44, p<.01$)」、「チームワークの大切さを学んだ($t=10.44, p<.01$)」、「ベストを尽くすことの大切さを学んだ($t=11.70, p<.01$)」、「フェアプレイの大切さを学んだ($t=10.26, p<.01$)」の質問項目については、それぞれ有意に高い得点が示された。このことから、「障がい者スポーツへの関心」が高い人は、「ベストを尽くすこと」、「チームワーク」、「フェアプレイ」というオリンピックの教育的価値への理解も高まっていることがわかる。

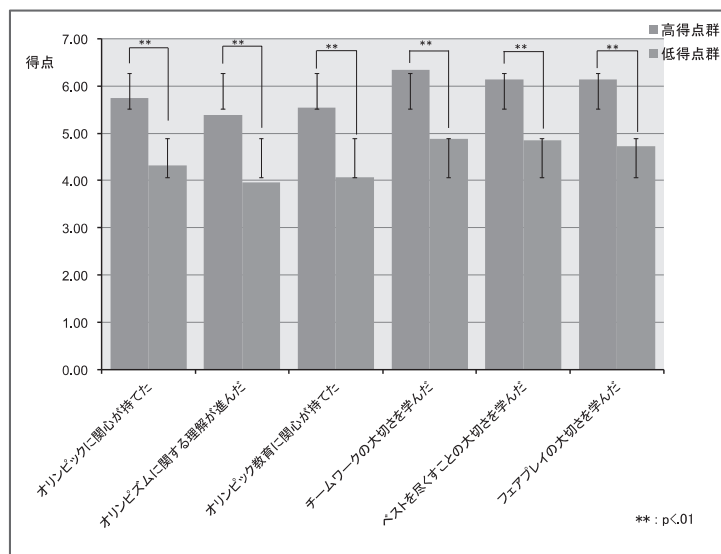


図 4. 高得点群／低得点群と他の項目との比較

(3) 自由記述にみる学生たちの学び

イベントの感想を問う自由記述欄にあげられたコメントから、学生たちの学びについて検討してみた。自由記述欄には、「パラリンピック種目が1種目しか経験できないので他の競技も経験できるというなと思った」、「パラリンピック種目を1種目だけでなくもう少し増やすといいと思う」、「なかなかパラリンピックについて関心がなかったが、今回参加したことで関心を持ち、パラリンピック種目をもう少しやりたいと思った」、「パラリンピック種目の難しさを改めて感じた」、「ブラインド走を体験して目が見えないことの恐さを改めて感じる事ができた。もっと色々経験したいと思った」などのコメントがあげられた。これらのコメントから、パラリンピック種目を体験するという試みが、障がい者スポーツへの関心を高めるとともに、学生たちにとって概ね意義のある体験であったと評価することができる。

一方で、ブラインド走りレーについては「慣れていない人がやるには危険な種目だと思う」、「スタートとゴールの接触でケガをしたり、ぶつかったりが激しいので、そこはしっかり考えなくては危ないと思った」など、危機管理に関する疑問を投げかけるコメントもあった。これは、非日常的な体験種目が、興味本位の遊びになってしまう危険性を孕んでいること示している。ガイドがランナーを先行し、引張って走るような場面がみられたことも含め、実施方法については改善と工夫が必要であろう。



写真1. ブラインド走りレー



写真2. ホイールチェアリレーの説明



写真3. シットイングバレー



写真4. シットイングバレー

6. おわりに～パラリンピックの種目体験を通して～

本稿は、競技祭 2015 で新たに導入した「パラリンピック種目の体験」の教育的効果について検討するものであった。本検討の結果、「障がい者スポーツへの関心」の高まりが、「ベストを尽くすこと」、「チームワーク」、「フェアプレイ」というオリンピックの教育的価値の理解促進に繋がることが明らかになった。

自由記述にあったパラ体験に関するコメントからは、これまでに経験したことがないパラリンピック種目の体験が、自他の身体について考えるきっかけや他人の立場に立ってものごとを考えるきっかけになっていることが読み取れた。知識学習だけでなく実際に体験することがオリンピックやパラリンピックへの関心を高め、理解を深めることに繋がるといえる。以上のことから、パラ種目体験は、参加者の学びを促進させるのに有効であるといえる。

その一方で、パラ種目体験の危険性を指摘する意見も出されたことから、単なる遊びにならぬよう実施時には十分に計画を練る必要があるだろう。しかし見方を変えれば、それほど危険な状況の中で、障がいを持つ人たちはスポーツを実施しているということでもある。学生たちの気づきを「危険」で終わらせ

るのではなく、どうしたら「危険」を回避しながら実施できるのかという「前向きな気づき」に変える仕組み作りも今後の課題としてあげられる。非日常の経験、これまでにない身体観、ものを考える視点、スポーツの多様さを知るという意味で、パラリンピック種目の導入はオリパラ教育に有用であったといえる。写真 1 から 4 は、競技祭 2015 で行ったパラ体験の様子である。

引用参考文献

- 1) 2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ホームページ 大学連携活動報告
<https://tokyo2020.jp/jp/get-involved/university/activity/>
- 2) 「オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告」2016 年 7 月 21 日オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議, http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/004_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375094_01.pdf
- 3) 新学習指導要領のうち中学校保健体育(平成 20 年度改定)「H 体育理論」では、「3. 文化としてのスポーツの意義」の中に、高等学校保健体育(平成 21 年度改定)「H 体育理論」では、「1. スポーツ文化の歴史, 文化特性や現代のスポーツの特徴」の中にオリンピックに関する内容が明記された。
- 4) 木村華織・黒須雅弘・田中望・出口順子、「競技祭」を教材としたオリンピック教育の実践教育活動
 —「とうがく競技祭 2014」実践報告—、東海学園大学研究紀要 人科学研究編、第 20 号、2015 年、pp.157-175.

(付記)

本稿で用いた写真については、本人の許可を得て掲載している。